

## 古代仏教彫刻史における「地方仏」の位相

九州大学大学院博士課程 宮田太樹

2014 年は、九州の仏教彫刻史にとって画期となる年であった。図らずも同時期に開催された福岡市博物館における「九州仏」展と九州歴史資料館における「福岡の神仏の世界」展は、いずれも対外交渉の最前線という当地の地勢的要因が畿内やその周辺とは異なる規範に基づく造像を醸成したことを鮮やかに描き出した点に大きな特色があった。上記二展に限らず、特定地域に着目し形の変遷をたどろうとする試みは増加する傾向にある。

本発表は、これらの成果と直接に関わるものではないが、上述の研究動向にも鑑み、「地方仏」が彫刻史においていかなる位置を占めうるのか考えてみたい。考察にあたっては、まず久野健氏によって提唱された“木彫民間発生説”（「大仏以後—平安初期彫刻の一考察」『美術史』26号、1957年）とそれに対する批判、そして近年の再評価に至る過程を再検討し、「地方仏」を考察するための基本的な観点を確認していくことにする。

平安初期彫刻の成立をめぐる問題は多岐にわたるが、大きくは様式の問題（古典様式への反立）と技法の問題（木彫像の成立）の2点に集約されよう。久野氏は、この問題に関して、『日本霊異記』に見える私度僧や俗人の木彫像製作説話にはじめて注目し、様式と技法における新たな要素が、上流階級の大寺院からではなく、民間寺院における真摯な造像活動から生まれたことを主張した。氏の見解は地方仏を含む官営工房以外の造像を積極的に彫刻史研究の俎上に載せることを試みたもので、美術史を広く社会史や宗教史の側面から捉えようとする視点も極めて斬新であった。その後、中野玄三氏や井上正氏らは、神仏習合の議論を交えながら、久野説を積極的に展開させた。一方、久野説の立場は、どの作例を民間寺院の造像とみなすかという具体的な検証において、研究者間の一致を見ないという難点をはらんでいた。そのため、氏が提唱した地方での造像という議論は、長らく学界の積極的な支持を得るには至らなかった。

1990年代以降、美術史学の研究において、「美術」を取り巻く社会的文脈を積極的に研究対象とする議論が盛んになると、久野氏の先駆的な試みは改めて注目されるようになる（長岡龍作氏「仏像の語り方の境界」1999年）。近年では文献史でも『日本霊異記』の説話内容が資料として評価されつつあり、これらの歴史学の新しい動向と呼応しつつ、奥健夫氏（2010年）や皿井舞氏（2014年）は、和歌山円満寺・十一面観音立像、京都神光院・薬師如来立像を、かつて久野氏が想定したような民間造像の具体例と位置づけ、地域信仰に根ざした木彫像の解明を進めている。

本発表では、こうした先学の試みに倣いつつ、福岡県糸島郡浮嶽神社に伝来する3軀の木彫像に改めて注目する。これらの造形を神仏習合の観点から読み解くことで、「地方仏」の歴史的な位相について展望を示したい。